

児童の宗教心理に関する考察*

神戸大学

高橋 省 己**

I 児童心理の特性と宗教

現代の発達心理学の観点から云えば、児童の宗教心理も発達の所産であると考えるのが妥当である。子どもは生れながらにして神佛の観念を有するとか、宗教的素質、宗教的本能を持っているとか主張されたこともあった。現在でもこんなことを云う人がある。併し、それは神学的立場か、何らかの意味で護教的な態度からの所説である。また、宗教的本能を説かなくとも、1つの本能、例えば性本能を基礎として宗教の起源を説明しようとするものもあった。即ち、宗教の性慾起源説 *théorie érotogénique* を唱えたのは、佛蘭西のビネ・サングレ Binet-Sanglé や米国のシュレーダー Th. Schroeder であった。この主張に対しては、ジェームズ W. James がその名著「宗教経験の種々相」 *Varieties of Religious Experience*, 1902に於て、決定的な批判をしている。それで、今日では、人間が先天的に単一の宗教的素質を有すると考えることは妥当ではない。

併し、これによって、児童が宗教とは無関係であるというのではない。むしろ、その心理的特性には、宗教の起源に関し、多くの示唆を与えるものを有しているし、ある意味では甚だ宗教的であるとも考えられるのである。

多くの児童心理学者は、児童の心理的特性について論じ、すぐれた幾多の業績を残している。併し、その中でも、宗教に関連して、最もすぐれた児童心理学の業績はピアージェ J. Piaget によってつくられた。彼は相前後して3つの重要な著作を公にしている。即ち、(1) 児童に於ける言語と思考 *Le Langage et la Pensée chez l'Enfant*, 1923. (2) 児童に於ける判断と推理 *Le Jugement et la Raisonement chez l'Enfant*, 1924. (3) 児童に於ける世界の表象 *La Représentation du Monde chez l'Enfant*, 1926. である。これらの著書に於て、彼

は4才から11才の子どもの心理的特性を明らかにした。前の2著に於て、子どもの思考の形態と機能を究明し、後の著作に於て、子どもの思考の内容を明らかにしたのである。即ち、前者に於て、児童の論理を究明し、後者に於て、児童の世界観を明らかにしている。

ピアージェは、思考を反映するのは言語であるという前提から、子どもの言語活動を研究し、その多くが自己中心的であることを発見し、児童の思考の特性は自己中心性 *égocentrisme* にあるといった。自己中心性というのは、成人のように、推理の連鎖を辿って理づめに思考するのとは違って、他人の立場に立って考えることがむずかしいことを意味する。彼等は自分のために思考し、他人に理解させようと努力しないのである。それは自己本位な、得手勝手な考え方ではあるが、成人の利己主義とは違う。成人の利己主義は、他人の立場が理解されているにもかかわらず、自分の立場、自分の利益を押しすすめる態度である。子どもといえども、自分と他人とを一応、区別することは出来るが、自他の関係意識が十分ではなく、自我が確立していない。自我が確立していないから、自他の区別が十分ではなく、自他融合、自他未分化な状態にあるのである。成人は他人や外界を意識する程度に応じて、自己を意識している。けれども、子どもにはこれが出来ない。

この自己中心的思考は、子どもを取りまいて世界を、どのように表象するであろうか。ピアージェは幾多の例をあげて、実証的にその世界観を説明しているのであるが、実証的なものを求めなくとも、およそ予想がつくのである。即ち、(1) 自他の区別がつきにくいということは、客観的な存在に対して、それを主観と同様に考え、主観と同じような属性を与えることになり、主観と客観とを同一視することになる。精神や生命のない客観的なものでさえも、主観と同様に、生命あるものと見なすことになる。これをピアージェは、子どものアニミズム *Animisme* といっている。(2) また、これとは逆に、主客未分化ということは、自他融合していることであり、それは主観に属することを、客観的に存在すると

* General survey on the religious psychology of children.

** by Takahashi, Seiki. (Kobe University)

いう考えを招来する。即ち、純粹に主観的なもの、即ち、夢や思考や言語等が客観性を持ち、実在であると考えられる結果となる。これをピアージェは、子どもの実念論 *Realisme* と呼んでいる。(3) このような思考様式は、我々の周囲にあり、我々を囲繞する事物現象、即ち、星も月も、夜も雲も雨も、川も人形もすべて人間が製作したものであり、自然の過程は人工の過程であると考えられるようになる。これをピアージェは子どもの人工論 *Artificialisme* であるといっている。

これらは予想であったが、子どもの生活は正しくこのとおりに動いていることを、ピアージェは、いろいろの例をあげて実証しているのである。然るにこのような思考様式、思考内容は甚だ宗教的であるということが出来ないであろうか。

アニミズムは、われわれが無生物であると思っているものに生命を附与し、生物と無生物とを混同した結果である。英国人類学派は、原始人にもこのことがあることを発見し、これをアニミズムと称し、宗教の起源をここに求めている。実は、ピアージェは、この言葉をかりてきて、子どもの世界観を表現したのである。勿論、子どもが自他の区別が十分ではなく、無生物も生命あるものと見做し、感情の流れているものと見る心理は、アニミズム本来の意味である「霊的存在への信念」、精霊や靈魂への信仰を意味しているのではない。むしろ、児童のアニミズムは、宗教学上の概念を用いると、マレット R. Marett のアニマティズム *Animatism*、或はリューバ J. H. Leuba の「原始的動力観」に相当するのではないと思われる。児童のアニミズムは、よく反省された上で構成された世界観ではなくて、原始的な所与である。従って、子どもが成長発達して、他人と接触し、社会生活の経験を得、知能が発達し、知識が増加するに従って、アニミズムを次第に脱却するのである。

子どもの実念論は、思考と物体とを混同したり、夢と現実とを混同したりすることを観察しての所論である。夢は外から来るものであり、客観的に存在するという考え方は、子どもたちに普遍にみる事実である。勿論、その実在の仕方については多少の差異があつて、夢は山の彼方にあるとか、部屋の中にあるとか、体の中にあるとか云ったりする。併し、何れの場合にも、自分以外の外部に実在するという考えを持っている。このような思考は、原始人、未開人にも同様にあった筈である。未開人は夢や失心を通じて霊的なものがあるという信仰に生きている。勿論、未開人の夢と子どもの夢とは文化的意義、社会的な評価が違っている。即ち、未開人にとっては、夢は文化力として重要な意義を持ち、ある特殊な夢

には社会的評価基準が設定せられて、彼等の運命を決するものであるが、児童のものにはこれがない。このように考えてくると、児童に於ける実念論は、宗教起源の問題と密接な関係があり、意義深い示唆を与えるもののようである。

人工論は、児童が日常経験する事実を自己中心的に歪曲して、解釈した結果である。子どもは彼を中心として、すべてが集合し、彼が欲するままに組織されていると考えている。欲するままというのが、それは第一次的な意味で自由に出来るという意味ではない。しかもその組織は両親やその他の人間によって作られたと考えている。これは、両親や他の成人に依存する彼等の生活であるから、当然このように考えるのであろう。従って、児童の人工論は、すべてが神の御意のままに作られたという神学上の人工主義に相通ずるものがある。或は児童の人工論が洗練されて、神学上の人工主義となったと云えないであろうか。勿論、神学上の人工主義は高い思想的基盤に立っている。

此くの如く、ピアージェによって明らかにされた児童の心理的特性に従って、宗教民族学上の資料と照応せしめると、宗教の起源に関し、幾多の示唆があると共に、児童の心理的基盤に、何か宗教的なものが秘められてあるように思う。勿論、高次の宗教的信仰の如きは、後ほどの発達をまたねばならない。

II 児童の生活に於ける呪術とト占

児童はお伽ばなしの世界に住み、そのお伽ばなしの中には魔術的な要素が多く、子どもはそれを楽しんでいるかの如くみえる。また現実と想像とを混同し易く、生物と無生物の区別がつき難いことは既に述べた通りであるが一切の現象に何か魔術的な力があるかの如く考えている。これは、児童が成人のように正しい因果律を理解することが出来ない為である。

子どもは正しい因果関係が想定されないものの間に、一種特別な関係を想定し易い。実在を変革するということは、成人にあっては合理的な方法によるのでなければ出来得ないことが理解されているのに、児童に於てはこれを非合理的な方法で変革しようとする。自己の意志を以て他者を意のままに取り扱おうとする強制的な功利的手段を用いようとする。これが子どもの「まじない」となってあらわれてくる。ここではレヴィ・ブリュール *L. Lévy-Bruhl* の先論理的 *prélogique* な思考、或は融即の法則 *loi de participation* を適用することも出来る。何れにしても科学的ではない。

てるてる坊主を作って明日の晴天を祈ることは、児童

の生活にあまねくみる事実である。アリババの話や「開けごま」の呪言はそのまま真実と考えられたり、しかもこの山賊の宝庫は何処かこの地上にあるものの如くに思われている。田舎の子どもの中には、雨蛙を弄んで弱らせた後、呪言をとなえて生きかえらせて遊んでいることがよく観察できる。お伽ばなしが楽しく聞けるのも、童話や漫画に夢中になるのも、これらの文化財の持つ呪術的な要素が、彼等の心理にぴったりとし、その心を奪うのであろう。同時に、彼等の心理にあうように、これらの文化財は適度に非合理的な要素を持っており、呪術的なのである。

子どもの生活には呪術的要素が相当に多い。「馬の糞を踏めば走るのが速くなり、牛の糞を踏めば力が強くなる」とか、「石をふところに入れて歩くと、途中で便意を催すことはない。或はたとえ便意を催すことがあっても、家の便所へ帰るまで持ちこたえることが出来る」とか、「夜、新調の着物を着ると狐にだまされる」とか、「ものもらいが出来たら、井戸の中をのぞくと治る」とか、「畳の上で新しい下駄を履いて歩くと道で倒れる」といったような伝承的なものがそのままに受容られている場合が多い。併し、こんな伝承的なものだけではなくて、子ども自身で呪を新しく作る場合も多いのである。例えば憎らしく思う人の写真をひき裂けば、その人に何か不幸が訪れると思ったり、門口を少しあけておくとお母さんが早く帰宅してくるであろうと考えたりすることである。嘘をつかぬために指きりをするとか、蛇を指させば指が腐るとか、この呪の創造については多くの資料があり、子どもの生活を相当に支配しているようである。

呪術はこのように、自分の意志を以て他者を自在に取り扱おうとする強制的な不合理な手段であるが、一方この呪術を消極的なものとしたものがある。それがト占である。即ち、自然にあらわれる現象で、吉凶を予知しようとする手段である。例えば、登校の途中で数えた電柱の数が偶数であったら試験の成績はよいが、奇数であると悪いとか、或は、いたちに道を横ぎられたり、蛇に出会うことが不吉の前兆と思われたりする。或は、いたちが道を横ぎるにしても、右から左へ横ぎった時には幸福がふところに舞込むと考えたりするが如きである。

これらの呪術、或はト占は、その地域社会に伝統的なものがあり、また即席に作られるものもあって、彼等の間には相当に拡がっている。いろいろ分類することも出来るが、それらは天候に関し、病気や傷に関し、吉凶に関し試験の成績に関し、子どものあらゆる生活部面に関するものである。

これらの呪術やト占については、面白半分のものもあるが、真剣にして気を病む場合もないではない。それは決して遊戯的なもので終るのではなく、彼等の欲求が強烈であればあるだけ、その目的を達成する呪術、その前兆をみるト占に対して真剣となる。併し、児童と成人との呪術やト占の間には、一般に大きな差がある。即ち成人の呪術やト占は1つの社会的実在であり、呪術の効果に対す信念は非常に強い。併し、児童に於ては弱くまた不連続である。勿論、児童に於ける呪術やト占は、彼等の知的な目覚め、科学的な思考の発達と共に崩壊してゆく。ところが、中には彼等の生活に長く残存し、その生活を規定する場合もある。成人の社会にあっては、鳥鳴きが悪いとか、彗星が出現するとか、或は竹の花が咲くと、人の死や戦争、或は不作を予知することが出来ると云われたりする。児童の生活に於けるかくの如き呪術やト占は、その宗教心理を考察する場合に、見落してはならないものである。

Ⅲ 宗教的情操

宗教に関する定義は宗教学にまつとしても、宗教的行動を特徴づける心的態度とは如何なるものであろうか。児童の世界観として、アニミズム、実念論、人工論が論ぜられ、その生活の中に呪術やト占が如何に多くあるにしても、それらの思考や態度は、果して宗教であるということが出来るであろうか。そこで宗教的行動を特徴づける心的態度について考察しておくことが大切となる。

これをデュルケーム E. Durkheim は「神聖観念」*la notion du sacré* と称し、オットー R. Otto は「聖なるもの」*Das Heilige* 即ち *Das Numinose* といっている。近年、多くの宗教学者は、生命の聖化だとか、神聖感だとかいう言葉を使用することが多い。

ところが、これらの直接的な意識状態を表現するものとしては、英語でいう *awe* (畏怖) という心持が、最もよく宗教独自の心理を表現するもののようである。これは我が国語にあてはめると「カシコム」という気持である。従って、宗教を心理的に定義する時には、畏怖だとか、畏敬という言葉が用いられ、これが宗教の最も中核的な心理的状态だと考えられている。オットーはその「聖なるもの」の主な要素である *tremendum* は畏怖 *awe* に最も近いといい、マレット R. Marett は畏怖こそすべての宗教的経験の根本的な要素であるといっている。併し、このような経験は感情的なものであり、また瞬間的なものであるので、人々によって多少意味を異にし、表現を異にするのも止むを得ない。ともかく、聖なるもの、畏怖を感じる心的態度こそ、人間の行動をして

宗教的たらしむる心理的決定因だと考えることは妥当である。従って、心理的にみれば、宗教的対象が何であろうと、また目的や行動の様式が如何なるものであろうと、宗教とは、畏怖、聖なる感じに決定されるものであると考えねばならない。

畏怖は、マレットに従えば、感情または情緒であるというし、人々はこれを情操であると考えている。マクドウガル W. Mc Dougall はこれを1つの情操とみており、それはいろいろの情緒の結合から成立っているものと考えている。マクドウガルに従えば、畏怖 awe の情操は嘆賞 administration の情操と恐怖 fear の情緒の結合したものである。そして嘆賞の情操は、驚異 wonder の情緒と自己卑下 self-subjection の情緒から成るというのである。即ち、畏怖の情操は驚異と自己卑下と恐怖という3つの情緒が複合した人間の感情的経験であるということになる。これが1つの中心的な観念に集中せられた時に、宗教独自の体験となる。このように畏怖の情操が幾つかの情緒の複合であるという考えは、オットーにしても、マレットにしても同様である。オットーはその宗教的経験の本質としての Das Numinose は *mysterium tremendum* であり、*tremendum* は恐怖または近づくべからず *Unnahbarkeit* という情緒、権威 *majestas* または優越 *Übergewalt* の情緒、および活力をもったものの *Energisch* の情緒を基礎としているといっている。

従って、畏怖、神聖感というものは、このような情緒の発現をまたねば味わえない心的状態といわねばならない。ブリッジス K. M. B. Bridges は生後2ケ年に於ける情緒の分化発達を表示したこともあるし、児童心理学者は一般に、満5才で日常生活に於ける基本的な情緒の発達をみるといっている。併し、畏怖だとか神聖感、崇敬、或は嘆賞といった情操は、悩みとかセンチメンタルという情緒と共に、まだ幼児期には発現しないとみるのが妥当ではなかろうか。従って、高等な宗教的感情、或は宗教経験は青年期に至って味わえるものと思われる。

IV 既成の宗教に対する児童の態度

既成の宗教に対して児童は如何なる態度をとるであろうか。それに関して、関寛之、城戸幡太郎、海老沢亮氏等の価値多い研究がある。最近には、私どもの研究室で堀江優君が「小学校児童の宗教意識の発達」について、これらのことを中心として質問調査して卒業論文を書いた。神戸市のある小学校の児童303名について調査したのである。これは、神佛の存在する場所、神佛の特性、資格、児童生活に於ける神佛の価値、神佛の異同について調査し、また靈魂、地獄と極楽、天使、悪魔等既成の

宗教観念に関する児童の反応を調べたものである。

これらの調査をみて一般的にいわれることは、児童期を通じて、伝承の影響が極めて大きいということである。児童は彼等の持つ被暗示性と強い模倣性から、教えられるままに信じ、宗教的な行事を疑うことなく行修している。併し、お伽ばなしの時期を脱する頃から懐疑的傾向がみられる。また知識が豊富になり、思考能力が発達するに従って、伝承に対して批判的となる。そして科学的知識と宗教的知識の対立、或は矛盾を問題としてくる。併し、児童期に於ては、伝承を強く否定するという態度には出難いが、その不合理性に対して不審を抱くようになるのである。かくの如き不審、疑惑、矛盾、反抗を克服して、宗教的経験を、宗教的自覚に達するのは青年中期以後と思われる。児童は与えられた宗教に対して受動的であり、成人のように積極的に宗教を求めることは少ない。軽信的であり、教えられるままに素朴に受けとめることは、他の場合と同様である。なお、児童に於ては、宗教は内面的な本来的な意味に受けとられず、外面的であるといえる。

V 児童に於ける宗教観念の獲得

プラット J. B. Pratt は児童宗教を論じて、児童が宗教観念を獲得する原因は、

- (1) 年長者の行為から受ける間接的な影響
- (2) 直接に宗教に関することを教えられること
- (3) 児童に於ける自然的な発達

をあげている。

祖父母、父母その他、子どもを囲繞する周囲の年長者の態度、或は行為が、児童の宗教心の啓培に大きな感化を与えることはいうまでもなく、前の調査が有力に物語っている。児童の持つ模倣性——成人のすることを真似ること、被暗示性——成人の意見や行動に暗示されやすいこと、おだてられやすいこと、律動性——飽かずに何回も同じことを繰返すことが、宗教観念を獲得することにもあらわれてくるのである。従って、児童が宗教観念を獲得するためには、児童を囲繞する人的環境は重要視されねばならない。

また、宗教観念が宗教的な事柄を直接に教授されることによって養成されることはいうまでもない。殊に批判力が乏しく、軽信的な子どもたちは、成人の教授を素直に受容れてゆく。

自然に宗教観念が形成されるというのは、児童の心理的特性に、多くの宗教的なものがあり、その日常生活の中に呪術的要素が相当に多いことを既に述べた。これらは宗教以前の心理的基盤であるが、より高次の文化に接

したり、いろいろな社会的経験を得たり、殊に深刻な人生問題に当面するようになって、真実な宗教意識を芽生えしめ、宗教観念を獲得していく。

思うに、2～3才ころまでは、すべて自己中心的に思考し、その生存は母に保護され、支えられている。そして宗教の面からいえば白紙の状態であるといえる。彼等の活動は周囲の成人の影響、或は模倣によるものが多く、宗教的行修はすべてここから発する。佛を礼拝し、神に祈を捧げても深い宗教的信仰から出るものとは思われない。成人の模倣であり、権威に対する素直な服従である。

4～5才ころは神佛に関する質問が多くなるが、それは一般に質問期の特徴が、神佛についてあらわれたに過ぎない。そして、それらは何れも外面的なものである。寺院の荘大、佛壇の華麗、儀式の荘厳は彼等の驚異となり、感銘を与え、好奇心を誘発する。彼等は疑うことを知らず、地獄極楽の話もそのままに信ぜられ、朝夕の礼拝は周囲の成人がなすかぎり習慣的となる。併し、死に対する恐怖は深刻ではない。生物と無生物の区別のつき難い彼等には、父母の死にあっても、死そのものについての悲しみの情緒は伴われ難い。

学童期に入り、アニミスティックな考え方から徐々に脱却し、想像と現実とが一致しないことが理解されるようになって、権威の前に従順である限り、神佛の存在を否定することはない。且、彼等の道徳、行動の規範は権威によって支えられている。簡単な因果しか理解でき難い彼等は、善因善果、悪因悪果も平板に受けいれられ、その道徳生活の基準もこのようなところに置かれる方がわかりやすい。神佛の罰を恐れるが故に、身をつつしむこともよくある。病気の時には素直に神佛に祈願し、自分の家の宗教には自負を持ち、それが罵られたりすると反感を持つこともある。死が生否定であることがその経験によって理解されるようになって、死の恐怖、死別の悲哀が深刻に感ぜられるようになる。

併し、学童期の終り頃から思春期にかけては、宗教の

外形的なものに対する関心はうすれ、危機に臨んで神佛に祈るころはあっても、宗教への関心はうすくなるようである。幼児から素直に行修していた朝夕の礼拝もお勤めも怠りがちとなる。

青年期に至り、真剣に人生問題に悩み、或は理想を考えるようになると、人生観の哲学と共に宗教を真摯に求めるようになる。ここに於て真実の宗教意識が確立する。回心 conversion の現象も、このころに多い。併し宗教意識の発達には、環境の形響が著しいことは前述の通りであり、無宗教的な環境に育ったものには、自己の考えを固執して、歴史的な宗教によって人生問題の解決を求めようとする機縁が薄い。また反宗教的な教育をうけたものには、宗教を求めようとしても求め得られない悩みが深刻である。即ち、たとえ人生問題に深く喰入っても、宗教に対する既成的な批判が先に立って、そのジレンマに悩むのである。殊に我が国の宗教批判者は、直接に既成の宗教々理に対決して批判せずに、外面から批判する傾向が強いのでこの種の青年の悩みが深刻となる。従って、幼児期から学童期に至る宗教々育は、人生の危機に際して重要な影響を持つというべきである。

参考文献

- (1) McDougall, W. : An Introduction to Social Psychology. 1931. Chapt. V.
- (2) Pratt, J. B. : The Religious Consciousness. A Psychological Study. 1928. Chapt. V.
- (3) Piaget, J. : Language and Thought of the Child. 1926, Reasoning and Judgement of the Child. 1928, World Conception of the Child. 1929.
- (4) 古野清人 : 宗教心理学説, 昭23.
- (5) 堀江優 : 小学児童の宗教意識の発達, 昭31 (卒業論文, 未刊)

—1956年10月24日受稿—